

3-3 効果発現に貢献した要因

(1) 計画内容に関すること

ラオスにおいては、母子保健が優先課題として掲げており、母子及びこどもの健康に目を向けている中、小予算で行える「歯ブラシ 1 本から始まるお口の健康」をキャッチフレーズに、むし歯予防から全身疾病予防へと繋がっていった。また、現地のニーズに合ったおり、現場レベルでも目に見える成果が上がったことが大きな要因となった。

(2) 実施プロセスに関すること

実施プロセスにおいては、ラオス側が歯科事情・歯科技術が発展途上にあり本事業に対して強い関心があり、結果沖縄研修での予防歯科の大切が肌で実感できたことや、これまでの沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターの医療援助、技術移転、人材教育など関連する形で沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター専門家を中心に時宜を得た支援を提供したこともプロジェクトに好影響を与えた。

3-4 問題点及び問題を惹起した要因

(1) 計画内容に関すること

本事業は、沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターにとって、沖縄平和賞受賞団体とはいえ JICA と初めての連携事業で、それ故に支援型が選ばれた。しかし、当初提案に対して、JICA 側からモデル校数（当初は 10 校）の拡大、セタティラート病院歯科医の育成、ラオス国立大生の実習、一般向けのデンタルフェアを組み込むことを求められ、現計画となった経緯がある。結果、対応しなければならない内容が多岐に亘り、研修員受入日数の削減、会員の専門家としての自費での参加、ラオス国立健康科学大学の巻き込みなどがなければ、成果の達成は見込めなかったであろう。支援型は、新たな開発パートナーの参画を促すための導入編的な要素が多分にあり、予算も 1000 万円に抑えられている。3 年間の協力期間と JICA から提供できる枠組み、そして提案団体の組織力、予算力に見合った計画を定める必要があった。また、沖縄国際センターにおいては、沖縄振興特別措置法での沖縄への貢献が求められており、同支援センターが沖縄平和賞受賞団体であることから、本事業がラオスのみならず沖縄にとってどのような位置づけとなり、沖縄にどうフィードバックするのか、との形成・採択時のビジョンが曖昧であったことも否めない。

(2) 実施プロセスに関すること

上述のとおり、本事業は期待される成果に対して予算上の大きな制約があったため、プロジェクトの 1 年目は、ドンコイ小学校 1 校を対象に、むし歯の治療及びむし歯予防のための、歯科検診・ブラッシング指導・予防教育を徹底的に行った。2 年目からノンハイ・ボンパオ小学校 2 校も加わり 3 校を対象とした。ノンハイ、ボンパオ両小学校に対しては、むし歯治療は行わず、むし歯予防のための、歯科検診、ブラッシング指導、予防教育を徹底的に行った。2 年目、専門家第四回派遣からは、ラオス国立大学附属小学校から強い要望があり、プロジェクトのコントロールとして付け加えることとした。ラオス国立大学附属小学校においては、歯科検診のみで、むし歯の治療・ブラッシング指導・予防教育は一切行っていない。ラオス国立大学附属小学校が加わることによって、膨大な検診の数となったが、ラオス国健康科学大学歯学部教員・歯学部学生の協力体制も得られ、著しい影響を与えるには至らなかった。

一方、未だにラオスにおける経済事情が悪いため、日々の生活に追われ、児童の健康管理、健康状態までは、目の行き届かないのが現状である。そのため、保護者や地域住民への歯科予防啓発普及には難しさが伴った。

3-5 結論

本事業は、地域と連携した学校保健を促進するとのラオス及びラオス国民のニーズを踏まえ、地域に根ざしたセタティラート病院、地域の学校と住民、ラオス国立健康科学大学が連携して歯科予防の学校保健に取り組むデザインとした。

「ドンコイ小学校での予防歯科指導体制確立がモデルとなり、ポンパパオ及びノンハイ小学校、地域住民等の関係者がより適切に予防歯科に取り組むようになる」としたプロジェクト目標は、小さな投入（予算）に対して想定した成果と活動が大きかったものの、ラオス及び沖縄からの自発的な参画をうまく促し、ドンコイ小学校のむし歯有病者率が 9 割強から 6 割までに改善したように、数値目標も含めて達成したと判断される。モデル校を病院の隣の学校とするなどターゲットグループの選定は適切で、プロジェクトの実施についても人的ネットワークを十分に活用し、乗り切ったと言えよう。

また、予防歯科を通じてラオスの子供たちに貢献したいとの沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターが目指すべき方向性、ラオスの国家学校保健政策に貢献し、また沖縄の特性を活かし、沖縄からの国際協力を推進するとの JICA の方向性に整合し、NGO と JICA が連携する意味、効果は大きかった。加えて、以下の 2 点が特筆される。

(1) ドンコイ村他の住民（児童の保護者）を巻き込んだ、学校保健、ひいては地域保健プロジェクトに成長した。これは予防保健医療の観点から、新しい取り組みのあり方を提示することとなった。

(2) 沖縄にとって、本事業の実施により、琉球大学とラオスの関係がさらに強化されるなど、大きなインパクトがもたらされた。沖縄県もこれを高く評価している。

以上、ラオスのニーズに適った学校・地域保健での方向性を示した、とする合同終了時評価の結果を踏まえ、ラオス側は継続を要望している。沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターも本事業を継続し、発展させたいと考えている。継続のためには、ラオス側にも予算措置が求められ、困難が予想されるが、ラオス側は予算がなくとも必ず継続する、と表明した。

継続するには一層の工夫が必要である。歯科検診には消耗品などのために 1 回 3 万円程度の予算がかかる。そのために、現在年 6 回の学校検診の回数を見直す、乳幼児からの親子に対する啓発活動を推進する、など新たな工夫が必要であろう。

こうしたことを踏まえつつ、継続について検討を進めていくべきである。

3-6 教訓

本プロジェクトでは、沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターとセタティラート病院歯科部のみならず、小学校児童から学校教員さらには保護者、地域住民へと広がっていった。さらに、プロジェクトに賛同した、沖縄は琉球大学や大正製薬の効果的な協力関係、ラオスはラオス国立健康科学大学などを巻き込むことによって効果的な協力が築かれた。このような連携が可能とな

った一因としては、プロジェクトが観念的な議論に終始するのではなく、「現場レベルでの目に見える成果・目標」を設定し、それに向けて関係者間の調整を図ったことが挙げられる。現場レベルでの具体的な目標設定と協力体制の構築は、以前からわれわれ沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターがラオス国に対する医療援助、技術移転、学術交流を地道に行ってきたことが本プロジェクトによって実証された。

3-7 提言

【ラオスでの課題】

ラオスでは2005年に、教育省及び保健省にて国家学校保健政策の策定が行われたにも関わらず、学校歯科保健体制及び十分な予算の確保ができず、他地域では予防歯科・学校歯科保健に対する意識が低く、児童や保護者、市民に対しての普及啓発が十分とは言えない。小学校も新入生が毎年入学してくるが、これまでの経験からむし歯有病者率が高いことが判っており、学校での検診など予防歯科の継続が望まれる。Dental Associationは結成されたものの歯科医師同士の横の連携は始まったばかりである。また、地域・個人においても経済格差が大きいため、自ら歯科治療に通うのは限られた人々のみである事実もある。

(注) 歯科の1回の治療費は50000キップ (約6\$)。

【今後のあり方】

よって、「ドンコイ小学校をモデル校」とし、さらに隣接する学校へ予防歯科・学校歯科保健の概念を普及・啓発・拡大していく必要がある。つまり、ラオスの学校保健における“学校”の位置づけが、寄生虫コントロールの場所から、「歯ブラシ1本からはじまる・・・」地域の健康増進活動の拠点として変化し、HPSの概念が共通認識されるようにならない。

さらに上位目標に近づけるためには、小学校レベルから予防歯科・学校歯科保健の概念を普及・拡大を継続させながら、地域レベル→県レベル→国家レベルへとボトムアップを図る必要もある。

合同評価の結果を受けて、保健省、セタティラート病院、ラオス国立健康科学大学、ドンコイ小学校など3モデル校、ラオス国立大学は、本事業の継続を、新入生を迎える学校での予防歯科、住民の意識・行動変容の維持発展、モデル校の成果の定着、近隣への普及を考え、間が空くことなく継続されることを強く望んでいる。

沖縄・ラオス国口唇口蓋裂患者支援センターは、口唇口蓋裂患者のチャリティオペレーションを続けていくこととしており、本事業も併せて継続することを検討している。

評価において、本事業が学校保健、ひいては地域保健のあり方を示していることが確認されていることを踏まえ、次のプロジェクトの検討が関係者間で進められるべきであろう。例えば、予防歯科概念の普及・定着発展のためには、母子保健の中に妊婦歯科検診・乳幼児歯科健診を組み込むことが有効かつ効率的であり、実施中の母子保健統合サービス強化プロジェクトや地域母子保健に携わるボランティアとの緩やかな連携も視野に入れることも一案である。また、ドンコイ村での継続的な実施に当っては、青年海外協力隊OVなどを起用し、長期的な配置の検討も考えられる。

語彙説明

d m f：乳歯のむし歯経験指数。dmfは、未処置のむし歯 (decayed teeth)、喪失歯 (missing teeth)、処置済みの歯 (filled teeth) の頭文字を取ったもの。

DMFT：永久歯のむし歯経験指数。DMFTは、未処置のむし歯 (decayed teeth)、喪失歯 (missing teeth)、処置済みの歯 (filled teeth)、歯 (tooth) の頭文字を取ったもの。

むし歯有病者率：むし歯を有している人の割合。

P C R：歯垢が付着していた歯面数を全体の歯数 (残存歯数の4面) で割ることで、個人のPCRを出す。

T B I：ブラッシング指導。

事業対象地区の地図

ラオス国ビエンチャン市内シサタナーク郡のドンコイ小学校（226人）、
 ポンパオ小学校（165人）2校およびハサイフォン郡のノンハイ小学校
 （158人）1校



図2

ドンコイ小学校検診風景



むし歯予防勉強会



夏休みで家族参加



乳幼児も参加



父母も参加

ノンハイ・ポンパオ検診風景



図3

歯垢染出し液で染めて



鏡で口腔内を見せて



一緒に歯磨きをした



鏡をみながら



低学年生をブラッシングしてあげる高学年生

図4



職員の積極的なブラッシング指導



図5

沖縄研修

琉球大学附属小学校歯科検診見学



2009年5月25日付けの琉球新報に「日本では親が子供の予防歯科に強い関心を持っている。ラオスでもまず親の意識改革から始めたい」と述べている。

小学校給食体験



1歳半検診見学



母親教室



図6

むし歯予防のパンフレット



虫歯予防パンフレットを熱心に読む子供たち

図7

技術移転

第一回検診



むし歯予防の勉強会



第三回検診



第五回検診



図9 勉強会風景

病院医師、歯科医師、看護師、開業歯科医師、歯科学生、教員との勉強会



図10 学校現場で歯学部学生の予防歯科指導実習



ドンコイ小学校児童の歯科治療見学実習



歯科検診参加した歯学部学生



歯学部学生を指導する専門家



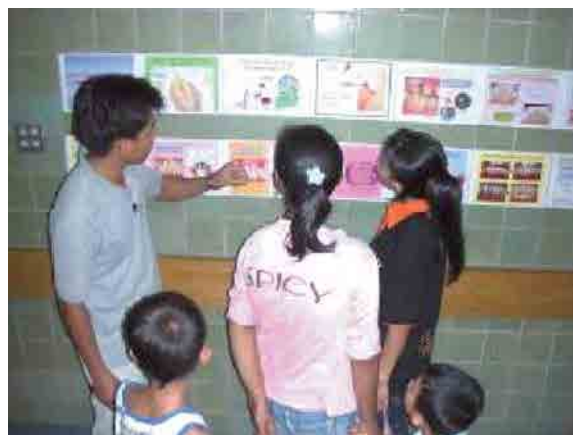
学生を指導するラオス国立健康科学大学歯学部副学部長

図11 デンタルフェスティバルをセタティラート病院で開催

検診報告



虫歯の成り立ちを説明



砂川先生による病院医師、歯科医師、看護師、開業歯科医師、歯科学生、教員への講義



図11 デンタルフェスティバルをラオス国立建国科学大学歯学部で開催

Vientiane Times February 21, 2011

Vientiane Times



Officials from Vientiane's Setthathirath Hospital and the Okinawa-Lao Cleft Palate Support Centre of Japan and schoolchildren gather at the NUOL Faculty of Dentistry on Saturday after the presentation of toothpaste by the Support Centre to children at Sathit, Phonpapao and Donekoy primary schools. The group previously gave desks and chairs to Nonghay Primary School three years ago. *—Photo by Sangkhomsay*



図12



大正製薬から歯ブラシ17万5千本贈呈

琉球大学医学部などが2008年からラオスで取り組んでいる「ラオス国児童に対する歯磨き指導による口腔内清掃状態改善事業」に役立ててもらおうと、大正製薬（東京）は同大学に歯ブラシ17万5千本を贈呈する。7日、琉球大学で歯ブラシの贈呈式と支援の調印式が開かれた。



沖縄平和賞受賞折るノート



歯科用ユニット贈呈



ドンコイ小学校検診結果「むし歯0」

第一回 10人



第二回 8人



第六回 38人



第四回 35人



第五回 62人

